

I 教育目標

「基礎・基本の充実」を「質の高い学力」へとつなげるとともに、「信頼される人間力」を育み、社会に貢献できる人間を育成する。

II 学校経営方針（中期経営目標）

「真の自己実現にTRY」をスローガンに、教育目標の具現化に向けたキャリア教育の推進を継続し、生徒の力が「伸びる学校」・生徒の力を「伸ばす学校」を目指す。本府「教育振興プラン」及び「学校教育の重点」を踏まえ、学習指導要領に即して創意・工夫した教育課程を編成し、日々の教育活動の充実に努め、希望進路の実現と心豊かにたくましく生きる人間の育成を図る。

- 1 地域・生徒・保護者に信頼され、地域と密着し地域を教育で支える学校として様々な教育活動を展開する。
- 2 キャリア教育の推進を図りながら、前向きな社会生活を営むための職業観を醸成するとともに、生きる力を育み、社会に貢献できる人間力を育成する。
- 3 一人ひとりを大切にしたい厳しくも愛情のある生徒指導を軸に基本的生活習慣を確立し、「自学・自習」の習慣を定着させ、個に応じた希望進路の実現を図る。

III 本年度学校経営の重点目標（短期経営目標）

1 希望進路の実現に向けた学力の充実

- (1) 授業を大切にできる姿勢と授業規律の確保に努め、基礎学力の定着と学力の伸長をねらいとする各取組の実践を図る。
- (2) 個に応じた適切な指導を行い、わかりやすい授業づくりや学習を支援するために、ICT機器や学習支援システムの積極的な活用を図る。
- (3) 多面的評価に資する観点別評価を引き続き実践し、新学習指導要領に沿って各科目の指導計画及び内容の研究・実践を進める。

2 生活指導の充実

- (1) 挨拶や身だしなみ等の基本的生活習慣の確立や、SNS、薬物乱用防止、交通安全等の規範意識の醸成に向けて、学校、家庭、地域が協働して指導を行う。
- (2) 各行事や生徒会、部、ボランティア等の活動をとおして、自己有用感の高揚を図り、主体的に行動できる態度を育てる。
- (3) 抱える課題の改善や克服、支援に向けて、多くの教員が関わりながら温かく丁寧に指導し、必要に応じて外部機関と連携を図る。
- (4) 「東稜大作戦」等の取組により、生徒と教職員が一体となって、高校生活を楽しくし、生徒の帰属意識と満足度を高める。

3 人権教育の推進

あらゆる場面での一人一人を大切にできる指導、を通じて多様性の理解および自他の生命と人権を尊重する意識や態度の育成を図る。

4 キャリア教育の推進

本校の各コース・クラスの特徴をより明確化し、クラス間や異学年の連携により職業観の醸成、希望進路の実現につなげる。また、各コース間における有機的な関わりを通じた積極的な「学び」の展開や、「総合的な探究の時間」等を活用しながら、変動の激しい社会に対応できることを目指したキャリア意識の高揚を図る。

生徒に選択と表現の機会を提供し、自ら考え人生を拓く態度を養い、自律かつ自立した生活力を身に付けられる契機とする。

5 その他

- (1) ホームページや学習支援システムなどを活用し、本校の特徴や教育活動の様子、緊急時の対応等の情報を積極的に発信する。
- (2) 会議などの精選、ICT、グループウェアの積極的な活用により、教職員の働き方改革を進める。
- (3) 広報活動を充実させ志願者の確保に努める。

IV 前年度の成果と課題

- 1 臨時休業、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策等により計画の変更や中止はあったが、さまざまな対応により生徒の学習、活動機会を確保することができた。
- 2 学力の定着をねらいとする取組、学力伸長の取組、個々の進路希望に応じた指導による進路実現は概ねできた。生徒の実態に即した目標の設定、指導内容・方法の工夫と改善、発達や心身および家庭環境等の課題に応じた適切な支援を含む指導と評価の一体化が急務である。
- 3 キャリアコースにおいて工夫して外部組織と連携し、他のコースでもキャリア意識の醸成をねらいとした取組を施することができた。引き続き「総合的な探究の時間」を活用しながら教科横断的、系統的に実施する。また、今後は学んだ内容を生徒自らが発信できる機会をさらに増やしていきたい。
- 4 基本的生活習慣の確立、規範意識の醸成、自他の人権を尊重する意識や態度を身に付ける指導を継続する。
- 5 必要とされる教育的ニーズに対して支援を行うことができた。今年度もより細やかに情報を収集し、適切な支援につなげる必要がある。

令和4年度 京都府立東稜高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（ 計画段階 ・ 実施段階 ）

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
				最終	
組織運営	<p>スクールミッション・スクールポリシーを念頭においた教育活動を全教職員の共通認識に基づき、具体的な取組の中で実践する。</p>	<p>会議や資料提供によって情報の共有を図り、必要に応じて積極的な意見交流を行う機会を持ち、教育活動について共通理解を図る。</p>	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員が主体的に学校改革に取り組めるように意見交流できる機会を様々な形で設けた。 ・他府県の高校8校、地元の中学校1校を訪問し、教職員の見聞を広めることができた。また、訪問した教職員による報告会を実施し、他の教職員と得た知見を共有することができた。 ・観点別評価について方向性を定めることができたが、さらなる研究が必要である。 ・令和4年度入学生教育内容について大学入試の動向等も見ながら検討を続けることが必要。
		<p>研修会の開催や校外研修会、管外視察等への積極的な参加により、本校の教育活動を随時点検、確認する。</p>	A		
	<p>本校の今後の方向性や新学習指導要領を踏まえ、地域から信頼されるよりよい学校づくりを实践する。</p>	<p>令和4年度入学生のコースや教育課程の学習内容の検討を行うとともに、組織的に効果的な観点別評価を实践する。</p> <p>各指定事業等を本校の教育活動に位置づけて、効果的な実施を図る。</p>	B		
学習指導	<p>BYODやICT機器、学習支援システムの積極的な活用を図りながら基礎学力の定着を図る取組を主導する。</p>	<p>義務教育段階の学び直しを含め、基礎学力の定着と発展的内容を両立するために、BYODや学習支援システムを積極的に利用する。</p>	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・指導と評価の一体改革を進め、学習面からも生徒の自己肯定感を高めることができた。 ・評価方法の変化に伴い、「形成的評価の見直し」等、評価方法について更なる研究を要する。 ・ICT機器の利活用について、Classi や Teams の活用法等を始めとして、各種機器やアプリについて校内データベースの構築を要する。
		<p>ICT 機器や学習支援システムの活用法を共有するために、教科主任会議等を有効に活用し、実践の機会を確保する。</p>	B		
	<p>わかりやすい授業づくりのための工夫と各教科の多面的評価に資する観点別評価の研究を一層深め、指導と評価の一体化を確実に実行する。</p>	<p>学習指導と学習評価の一体化を周知・徹底し、確実に実行する。</p> <p>総合的な探究の時間を活用し、生徒が意欲的かつ主体的に取り組み、学習効果が上がる授業手法の研究に努める。</p>	B		
キャリア教育	<p>キャリアコースの取組を発展させ、すべての生徒のキャリア意識の高揚を図る取組を实践する。</p>	<p>上級生と下級生が協働して取り組む縦断型学習、各分野が連携した横断型授業の推進、充実を目指す。</p>	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・各コースでの特色ある取組（特別授業など）はコロナ禍前の状態まで戻りつつあるが、横断的な取組まではまだ行えていない。 ・年度初めから京都市・乙訓地域の全中学校に訪問し、広報活動を行った。説明会においても申込数が昨年度よりも増加。広報活動の効果はあったと思われる。また、マネジメントクラスにおいては“防災博覧会”の開催の他、生徒が行う出前授業も昨年度より実施回数が増えており、本校の知名度向上に貢献している。 ・1年次の総合的な探究の時間の他、各コースでもプレゼンテーションの機会が設けられている。
		<p>キャリアコースを中心とした本校の特色や魅力、取組を地域に発信し、地域との連携を深める。また、出前授業や学校説明会を通して、中学生に本校のキャリア教育についての周知をはかる。</p>	A		
	<p>「総合的な探究の時間」を教科横断的、系統的に実施し、協働学習、プレゼンテーション等をとおして主体性を培う。</p>	<p>教科の連携をはかった横断的な取組や各コースの専門性を活かした学年縦割りの取組、地域との連携をはかった体験的な学習等をとおして、主体的な学びに結びつける。</p> <p>プレゼンテーション能力や文章表現能力を身につけることで、生徒自身のキャリア形成の一助とするとともに、自己有用感を身につける。</p>	B		
人権教育	<p>自他の生命と人権を尊重する意識や態度を身に付ける取組を实践しつつ、教育活動全体を通して人権感覚の涵養を図る。</p>	<p>ホームルーム活動や特別活動を通して、深い信頼関係に基づく人間関係の構築を促す。</p>	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年2回の人権学習を行い、多様性を意識させることができた。 ・講演を聴いてアンケートに答えるだけでなく、効果的なフィードバックを伴った活動の時間を設定する必要があると感じる。来年度以降の課題としたい。
		<p>人権学習や総合的な探究の時間などをきっかけに、自己の行動のふりかえりや他者との意見交流を図り、多様性を認め合う心を育てる。</p>	B		

生徒指導 特別活動	基本的な生活習慣の確立、規範意識の醸成を図り、主体的に行動できる態度を育成する。	スマートフォン・身だしなみ・遅刻等、生活面での課題において、学年部と連携を図り、段階的に指導する。	B	A	東稜祭（文化祭・体育祭）は、コロナ以前の形で実施したが、生徒会・委員会・部活動を中心に取り組みを進めることができた。校則見直しについても生徒会・委員会を指導し、全生徒が当事者意識を持てるように取組方法を工夫した。生活面においては、頭髪指導については学年と連携、粘り強く指導できた。身だしなみ、遅刻防止等については継続的な課題と考えている。特別指導においては個に応じた指導を意識して生徒対応をした。
		生徒個々の特性の理解に努め、「教育支援機能」を有し、個に応じた指導をする	A		
	人権と多様性を尊重する態度を養い、自己有用感の高揚を図る取組を進める。	校則の見直し・東稜大作戦にあたり、人権尊重の観点を柱に生徒と連携しながらルール作りを推進する。 部活動・各種行事の取組を自主的活動と捉え、生徒の自治能力を高め、リーダーを育成する観点で委員会及び種々の会議を開催する。	A A		
進路指導	キャリア意識を高めて、自らの将来を主体的に考えさせる取組を進める。	各学校行事や学期の振り返り時に、ICT 機器を用いてポートフォリオの作成を行っていくことで、生徒自身の自己分析につなげ、生徒のキャリア意識を高める。	C	B	1年生において、各学期総括、年度総括を紙にて作成させ、ICT 機器において画像で保存し、CLASSI のポートフォリオ機能に保存した。今後は、デジタルファイルとして、より再利用に適した形での保存が望まれる。学校紹介の就職合格率 100%であり、途中進路変更による就職希望者も担任と連携し手厚くフォローできた。進学補習・通常の授業の評価として、実力診断テスト・模擬試験の結果を定期的に部長会にて提示することで、授業や進学補習の内容の見直しに取り組んだ。今後は、更に見直しから、実際の内容の充実につなげたい。3年生において、個別指導対応の生徒の成績の伸長は顕著だった、またそれが進路実績にも繋がったと言える。今後 1・2 年生においても、個別指導を広げて学校の仕組みとして確立させる必要がある。
		担任と密に連携し、就職講座では、手厚く適宜個別面談を実施することで、生徒の進路選択のサポートを行う。	A		
	希望進路の実現に向けて、学力伸長を図る取組と進路別取組を主導する。	進学補習（東稜チャレンジ講座・通常補習等）を有効に活用し、模擬試験に対応した発展的な学力を育てる。 担任・教科と連携し、学力上位層の生徒の情報を定期的に共有し、個別指導を行うことで、組織的に学力上位層の生徒の進路意識の向上と、さらなる学力の伸長を図る。	B B		
健康安全 特別支援	健康に関心を持ち、適切に行動できる知識と態度を身に付けさせる。	健康診断、生活とからだのアンケートの実施。感染症に関する情報を、委員会を通して発信。	A	A	本年度は生徒対象のアンケート結果を「ほけんだより」を通して伝えることができた。多様な個性を持つ生徒にどのように向き合うかが課題である。
	生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じて適切な支援を組織的に行う。	多様な課題を持つ生徒の状況把握し教職員で共通理解し、適切な支援を務める。	A		
学校 図書館	効果的な教育活動の実践に向けて、図書館の機能の ICT との融合を図り、最大限活用できる体制作りを進める。	学校図書館としての機能をより向上させ、利用者の実態に即した利便向上に努める。 生徒の読書活動の推進と図書館の利用を促進するために ICT を活用する。	B B	B	ICT 化を進めるための他校の事例を収集し検討した。府立図書館電子書籍利用の ID を教職員に配布した。図書館のイベントやワークショップと委員会活動を関連付けて実施し図書館の利用者の増加を図った。
施設設備管理	安心・安全で教育効果向上に繋がる施設・設備環境の維持・管理に努める。	修繕等対応を行った箇所の報告を Classi で配信する。 (Before・After の写真付き) 修繕等を行った箇所を、定期的に職員会議等で全職員に伝達する。	B B	B	・Classi にて、修繕内容を一覧表にして報告を行った。
修(就)学 支援	修(就)学機会保障のための支援策を充実させ、保護者への情報提供を促進する。	制度案内だけでなく、書類の提出締切やその後の通知、給付金の振込日程等についても随時 Classi で周知する。 担任と家庭状況の情報を共有する。	A A	A	・Classi で周知した。 ・対象者が少ないお知らせにも Classi を活用できないか検討している。 ・担任と家庭状況等を共有し、保護者への情報提供等スムーズに行うことができた。 ・担任だけでなく教務部とも相互に情報交換することにより、共有漏れが減少した。

学年	<p>【第1学年】 高校生としての自覚と目標を持ち、落ち着いた学校生活を送らせる。 また、学年、学級指導を計画的に行い、自己と他者の関わりを大切に、互いに協力し合って高め合える学年づくりを目指す。</p>	<p>生徒の自己肯定感を高めるため、定期考査や小テスト等の準備をする機会や契機を設定していく。学習チェックシートの記入、きめ細やかな担任面談などを行っていく。</p>	A	A	<ul style="list-style-type: none"> 定期考査直前の学習チェックシートと事後の振り返りを行うことができた。日常的に生徒とコミュニケーションをとり、必要に応じて、面談を行うことができた。 入学当初にアイスブレイクを企画し、校外学習や東稜祭でも、生徒の交流を深める機会を作ることができた。しかし、友人関係等がもつれたとき、その不和を解消するほどには、精神的成長を促すことができていない。
		<p>互いの個性を尊重して協力する態度を養うため、四月当初のアイスブレイクや、校外学習、東稜祭などの取組を企画していく。</p>	A		
	<p>【第2学年】 健康的に自立できる生徒を育成する。健康で、自分のことは自分で考え行動できる生徒を目指す。 全力で取り組むことを大切に、真剣だからこそ楽しめる、お互いのこと高め合える学年づくりを目指す。</p>	<p>担任によるきめ細やかな生徒・保護者との面談、家庭連絡を行う。</p>	A	B	<p>欠席状況や学校生活の様子を家庭連絡を行うことができた。生徒が自己決定、自己選択できる機会を提供することに関しても一定成果はあったが、教員の余裕がない時に生徒の成長を待たず、選択肢を生徒に提示できない傾向にあった。 各段階に応じた目標を定め、成長を促す必要がある。</p>
		<p>校外学習、研修旅行など学校行事を通じ、生徒が自己決定、自己選択できる機会を提供する。 生徒が「ありがとう」「ごめんなさい」を言えるように指導し、人間関係の構築ができるようにする。</p>	B		
	<p>【第3学年】 進路実現のために、教科担当者、各分掌と緊密な連携を図り、生徒一人一人のきめ細かい指導を進めていく。</p>	<p>担任による生徒・保護者との面談、家庭連絡を丁寧に行い、進路実現に向けて適切な助言を行う。</p>	A	B	<p>各担任が積極的に進路情報を受容し、一人一人の生徒の情報共有につとめた。また、生徒・保護者とのきめ細かい連絡や面談を図ることができた。 一方で、欠席、遅刻においては指導が十分に行き届かず、より適切な対策を講じる必要を感じた。</p>
	<p>最高学年として、後輩の手本となるよう、規範意識を持たせる。また、成人年齢引き下げに伴い、社会的責任を意識させる。</p>	B			
評価領域	重点目標	具体的方策	評価 最終		成果と課題
国語	生徒の意欲と努力を喚起し、評価する。	生徒の意欲を引き出す導入を行い、生徒の主體的な活動を積極的に取り入れる。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> 各単元で導入を工夫することができたが、タブレット等のICT機器を用いた主體的な活動をより増やしていきたい。 小テストやICTを用いた課題配信等を計画的に実施することができたが、家庭学習の定着に導くことは難しかった。 担任と教科担当者で情報を共有できた。 教科内で評価の在り方や評価方法について検討し、観点別の評価を意識した考査を実施することができた。
		小テストを定期的組織的に実施し、家庭学習の契機とし、漢字力や語彙力、古典単語力の定着を図る。	C		
	教員間の連携を深め、共通理解に努める。	生徒の情報を共有化し、指導に役立てる。	B		
		教材や進度の打合せを綿密にし、考査の共通化を試み、観点別の適切な評価につなげる。	B		
地歴 公民	科目間の連携を深め、横断的な探究学習につなげる。	教科会議を活用し、それぞれの科目の学習状況の把握に努め、魅力的なテーマ設定につなげる。	B	B	<p>探究学習で生徒がICT機器を活用してプレゼンテーションをおこなうなど、学習意欲の向上にもつながる取組は一定できた。同一科目内での連携は取れていたと考えられるが、科目間の横断的な取り組みは発展途上の段階であるので、来年度の課題としたい。これまでの蓄積を来年度からの新たな科目に活かせるよう、担当教員間の交流をさらに深めていきたい。</p>
		普段の授業から生徒自身が問を立てられるように、導入や発問の工夫を図る。	B		
	協働学習を充実させ、主體的な学習者の育成を図る。	ICT機器を積極的に活用し、生徒の活動の活性化を図る。	B		
		取組に対する自己評価と他己評価から自己肯定感を高め、学習意欲の向上に努める。	B		
数学	分かりやすい授業を実践し、生徒がやり切れるように支援する。	日々の授業の課題やこまめなテストの実施により、基礎学力を定着させる。	B	B	<p>習熟度に合わせて既習事項の復習を適宜行いながら、基礎学力の定着を図ることができたが、欠席が多い生徒への対応が課題である。 チャレンジ講座や進学補習を通して進路実現に向けた指導を行うことができた。今後は個別指導もより充実させ、進路実現につなげていきたい。</p>
		1年生は中学校の学びなおしを、2～3年生は既習事項の復習を適宜行う。	A		
	進路実現に向けた取組を計画的に行う。	模擬試験などの事前指導、事後指導を充実させる。	B		
		進路希望に沿った長期休業中補習・平常補習を充実させる。	B		

理科	日々の授業の学習規律の向上に努め、視聴覚教材の利用、実験の導入など、興味付けを行いながら基礎学力の定着を図る。	授業における指導状況の情報交換に努め、課題の共通理解を図ることで指導に役立てる。ICT 機器の積極的な活用（特に実験時）を図る。	B	B <ul style="list-style-type: none"> 各講座の指導状況や生徒情報を、教科内で共有することができた。ICT 機器の積極的な活用を行うことができた。より有効な活用方法を教科内で共有する取り組みを行いたい。 授業全体を通してやり切らせる指導を実施できた。評価については、授業内の学習課題や小テストなどの観点を充実させ、多面的に実施できた。欠席生徒への対応も行い、一人一人の「できる」という肯定的な感覚を持たせることができたように感じる。 大学連携、外部との連携においては、昨年度よりも量、質ともに充実させることができた。 進路補習においては、完全に個別で対応し、個々の必要としているものを提供できた。
		学習課題、小テスト等を実施し、学習内容の定着を図る。また、課題、テストにおいて、できたという肯定的な感覚を持たせる指導を行う。	B	
	理系の進路指導の助力となるよう、教科の発展的指導に努め、個々の希望に応じた適切な進路学習指導を実施する。	大学との連携事業を計画的に実施し、教科指導、進路指導に役立てる。	B	
		進路補習において、個々の希望に応じ、充実した補習になるように努める。	B	
保健 体育	生涯にわたって健やかな身体を養うための実践力や知識を身につけるとともに、自らの健康を管理し、改善できる資質能力、態度の向上を図る。	健康作づくりのための運動の大切さを理解させるとともに、体力づくりを実践する。	A	B <ul style="list-style-type: none"> 毎時間のトレーニングや持久走を通して、体力の向上を図り、生涯を通じた健康づくりの意識を向上させることができた。 コロナ禍の授業展開も3年目になり、自粛していた活動も感染対策を施しながら実施することができた。 キャリア実習においては、マリン・野外・ゴルフ・医療を行うことができ、生徒たちに多くの経験を積ませることができた。
		ルールやマナーを守り安全に配慮すること等により、体育の授業をより円滑にそして安全に参加し活動させるための心構えを身につけさせる。	B	
	キャリアコースライフスポーツの講演（講義）や実習の内容をより一層充実させる。	生涯スポーツ、体育特講、総合的な探究の時間の各授業内容を工夫し、学年を超えた縦の繋がりの強化を図る。	B	
		外部講師の活用を充実させ、内容の整理を図りながら、より質の高い取り組みを実施し、専門種目の技術向上に繋げる。	B	
芸術	基本的な授業態度を定着させる。作品を完成・発表させるまでの過程・工程の自主的思考力・判断力を建設的に身に付けさせ、自己有用感をもたせる。	授業を大切にさせ、授業規律を守らせることで、生徒が安心して受けられる授業を展開する。	B	B <ul style="list-style-type: none"> 新しい試みとして芸術選択者全体で発表の交流が行えたことは、講座を超えた交流となり生徒の情操感を育む機会の一つとなった。 制作や練習の方法として「単独学習」「共同学習」の偏りのないよう指導することを継続する。 授業規律や安全管理の徹底を継続する。 中学時代にコロナ禍によって学習に制限がかかっていたリコーダー等の対策が必要である。
		単元毎に、生徒が自主的に考え、行動できていることを評価する。また、その評価の積み重ねることで、生徒の情操感や達成感を育む。	B	
	作品を完成・発表させるまでの過程・工程の自主的思考力・判断力を建設的に身に付けさせ、自己有用感をもたせる。	時間をかけて取り組む過程を大切にし、作品を愛する心や情操感を養う。	B	
		作品の完成や発表だけでなく、取り組む過程・工程等、生徒が自主的に考え、行動できていることを評価する	B	
英語	英語の基礎的な知識の定着を図る。	学び直しによって、早期に生徒の躓きを把握する。	B	B <ul style="list-style-type: none"> 学び直しに重点を置き、知識の定着を図った。ICT 機器の活用に関しては、1人1台タブレットの効果的な活用法を、来年度以降も教科全体で模索する必要がある。
		提出物や小テストを利用し学習習慣を確立させるとともにICT 機器を活用し、わかりやすい授業や学習支援を行う。	B	
	英語を通して言語や文化に対する理解を深め、コミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。	パフォーマンステストや Team Teaching を活用し、4技能の統合を目指す取り組みを定期的・継続的に行う。	B	
家庭	社会と家庭生活に目を向け、主体的に生活の充実と向上を図る。	GTEC を活用し、生徒の学習意欲や学力の向上を図る。	B	A <ul style="list-style-type: none"> 単独で調理し、試食する調理実習を実施することができた。クラスを分割して実施しなければならなかったり、1時間で試食・後片付けまで完了しなければならないなど課題が多かったが実施することができた。 1年家庭基礎では授業規律や定期考査に向けた学習の仕方について指導することができた。授業中の取組が評価に反映され、日常の学習が考査の得点に結びつくことを理解する生徒が増えた。
		主体的に生きる生活者として、必要な知識と能力を身につけることを目標に、実験・実習を取り入れる。	A	
	学習規律の向上に努め、授業への集中力を高め学習内容の定着を目指す。	自分らしい生き方について考え、生徒自身が主体的に考える力を育てる教材を工夫する。	A	
		授業を大切に学習姿勢について指導し、基礎学力の定着を図る。	B	
		視聴覚教材を工夫し、授業への集中度を高めさせる。	A	

情報	情報と情報技術を活用して問題を発見・解決する方法について、理解を深め技能を習得させる。	問題の発見・解決に向けて様々なアプリケーションソフトを取り扱いながら情報活用能力を高める。	B	B	今年度から新課程科目「情報Ⅰ」を実施し、問題解決に向けて情報活用能力を高めることが一定できたが、主体的・対話的な活動において積極的になれない生徒への対応が課題である。 図解を利用することで興味・関心を高めることができ、実習を通して実践的な学びになった。
		主体的・対話的な活動を取り入れる。	C		
	情報社会と人との関わりについて理解を深め、情報社会に主体的に参画する態度を養う。	図解を利用しながら、情報社会に積極的に興味・関心を持てるように指導する。	B		
		実践的な学びになるように指導内容を工夫する。	B		

学校運営協 議会による 評価	「東稜大作戦」と称する学校改革は順調に進んでおり、学校生活アンケート結果より生徒、保護者からも改革の方向性が支持されていることが分かる。今後も時代の変化に合わせた改革を進めていくことが大切である。
----------------------	--

次年度に向 けた改善の 方向性	今年度から1年時の数学と英語の授業の中で「学び直し」を組織的に実施することで、基礎学力の定着が一層進んだ。次年度は、1年時からの系統的な進路学習の改革に取り組み、早期に進路意識を高めることで、日常の学習により一層主体的に取り組む姿勢を育てる。
-----------------------	---